

〔論文〕

2008 年以降の領域「表現」のテキストの分析

—保育現場における子どもが音・音楽を聴き探索・探究する事例に焦点をあてて—

田 中 知 子
Tomoko Tanaka

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究は保育者養成校のテキストに示された子どもが音・音楽を聴き、探索・探究する事例の分析を通して、子どもの創造性を育む音・音楽の体験とはどのようなものを明らかにすることを目的としたものである。そして、その知見を踏まえて、領域「表現」の指導法において学生が理解しておくべき事項について検討することを目的とする。2008 年以降に刊行された領域「表現」のテキストから 19 冊を抽出し、保育現場における子どもが、音・音楽を聴き探索・探究する事例 58 件の分析を行った。その結果、事例の内容を「音に気づいて聴く」「音を聴きながら探索する」「音を意図的につくる活動」「楽器遊び」「声の表現・歌の創作」「リズムや拍を楽しむ」の 6 つに分類することができた。これらの分析を通して、子どもが「音を鳴らしたりする遊びの中で耳を澄ませて聴くことを中心に、五感を働かせ環境に関わりながら、色々な音を探索・探究していく」「身近なモノや声などを使って、即興的に応答しながら音楽をつくり出す」等を体験することにより、創造性が育まれていくという知見が得られた。また、そうした子どもの創造性は、原初的なフェーズ・探索のフェーズ・探究のフェーズという 3 つのなだらかな段階の中で育まれていくことも見いだされた。以上から、学生が理解しておくべき点は、子どもの表現を受け止め、子どもが今、どのフェーズの中で体験しているのかを把握し支えることであると示した。

キーワード：保育内容表現、テキスト、保育現場、探索・探究、音・音楽をつくる

I 研究の目的

本研究は、保育者養成校のテキストに示された子どもが音・音楽を聴き探索・探究する事例の分析を通して、子どもの創造性を育む音・音楽の体験とはどのようなものを明らかにすることを目的としたものである。そして、その知見を踏まえて、領域「表現」の指導法において学生が理解しておくべき事項について検討することを目的としている。

保育者養成において領域「表現」の指導法に関する科目は、幼稚園教育要領や保育所保育指針の改訂・改定並びに、養成カリキュラムや免許法の改訂等によって時代とともに変化していくと考えられる。その改訂等の趣旨を踏まえて、学生等が使用するテキストが編纂され出版されている。そのため、テキストを検討することで、領域「表現」の指導法でどのようなことを学生が理解していくことが求められているかの概要を把握することができると思われる。

領域「表現」の指導法に関する科目において、幼稚園教育要領の領域「表現」に記載されている内容を踏まえる必要があるが、そこには、音楽的な要素、造形的な要素、身体的な要素などを含みながらも広く、子どもの感

性や表現を育むことがねらい・内容として示されている。とくに、2008 年の改訂では、内容の取扱いの（3）において、「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」という視点が追加された⁸⁾。

また、2017 年の告示では、子どもが「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」が新たに示された⁹⁾。このことに鑑み、音楽的な表現においても、子どもの「感性」「表現力」「創造性」の育成を目標に、身の回りの音に気づいたり感じたりすることが十分に経験できる音楽的な活動が重要であると考ええる。子どもが身の回りの音に気づくためには、遊びの中で五感を働かせてヒト・モノ・コトと関わりながら気づいたり、音を探索・探究するという、創造的な音楽体験を重ねていくことが肝要であると考えられる。

保育の中で、子どもたちは様々な遊びや活動を通して、身近な環境や興味あることに対して探索したり、探究していくが、そのことについて詳細に取り上げられているのが、領域「環境」である。すなわち、その目標として「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」

ことが掲げられており、子どもの豊かな感覚や感性の育みは、活発な探索活動が促される中で培われていくことが示されている。

他方、幼児期に育みたい資質・能力における「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」では、豊かな体験を通じて幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすること、また、その気付いたことやできるようになったことなどを、使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすることの重要性が示された。このことを、音の探索・探究に照らしあわせてみると、領域「表現」の内容（５）「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」にあるように、子どもは様々な素材に触れながら音を探索したり、そこから音の違いに気づき、さらによい音にするにはどうすればよいかと興味を持って探究することで、自分のイメージした音をつくり出していきと置き換えることができる。このように音の探索・探究を通して、子どもは豊かに遊びを広げながら、幼児期に育みたい資質・能力を体験的に身に付けているということが言えるだろう。

また、子どもは、園生活の中で歌うことや奏でること、動くこと等を通して、音・音楽にかかわりながら表現することを楽しんでいる。自分自身で音に向き合ったり、あるいは友だちや保育者との協同的な音楽表現を体験しながら、感性や創造性を育てていると考えられる。そうした中、子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる体験とは具体的にどのようなものであろうか。学生が将来、保育において音楽的な表現を援助・指導する上で、子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる体験とはどのようなものかを理解しておくことは重要である。そこで、本稿では領域「表現」のテキストに記載されている創造的な音楽体験の事例として、子どもが音・音楽を聴き探索・探究する体験に焦点をあて、そこから示唆される知見を整理することとした。また、それらの知見を踏まえ、学生が理解しておくべき領域「表現」の指導法について検討する。

さて、創造・創造性について、ヴィゴツキー（1930, 2002 新訳版）¹⁴⁾ は、たとえわずかでも新しい部分を含んでいるものすべては、人間の創造の過程で生まれたものであり、想像力があらゆる創造活動の基礎であると示唆している。同様に高（2017）⁶⁾、西島（2014）¹⁰⁾ においても、創造性の育みにおける想像の役割や重要性について示唆している。また、奥（2018）¹¹⁾ は、イメージを豊かにするには、まず単体のイメージデータを蓄積しそれを関係づけや系列化することにあるため、できるだけ多くのものと出会う経験をするものと指摘している。加え

て、蓄積したイメージデータは視覚的なフォルムのデータだけでなく、五感からのイメージも蓄えており、これらのイメージを加味してイメージをつくるのが独自のイメージ形成へとつながると述べている。

これらのことから、本研究における創造・創造性の視点は、どんな小さなことでも新しく創り出すことは創造であり、すべての人にその力は備わっていること。そして、創造性の基盤はイメージであり、そのイメージを豊かにするには日常生活における五感を用いた多様な経験が重要であるということとする。

次に、創造性を育むと考えられる、音・音楽にかかわる体験について述べられた先行研究を概観してみる。

井本（2018）³⁾ は、身の回りの物や楽器で音を探したりすると、音を発想する楽しさを知り創造性を豊かにする力を育むと述べている。

また、赤津（2014）¹⁾ は、音を作り出す行為は、自らが対象に働きかける創造的な活動であるとし、子どもを取り巻く環境すべてを対象として、音素材を拡大して考えることの大切さを示している。

さらに、楽器を用いた遊びにおいて高地（2020）⁴⁾ は、拍子やリズムに縛られずに自由に楽器の音色を楽しみ、イメージを膨らませて表現することが、子どもの表現力や創造力を育むと述べている。それには日頃からいろいろな楽器に触れて楽器の音や特性を知っておくことの必要性を示している。また、楽器以外の様々な素材から出る音を使った表現においては、素材による音色の違いの発見や表現方法の創意工夫につながり、より豊かな感性や表現力、創造力を育むと示している。

以上の先行研究に示される示唆をまとめると、「音を聴く、音を探す、音をつくる」ことによって創造性は広がり豊かに育まれる。加えて、「拍やリズムに縛られずに自由に楽器の音色を楽しむ」ことや「イメージを膨らませて表現する」ことも創造性の育みにつながっている。そのため、「日頃からいろいろな楽器に触れて楽器の音や特性を知っておく」必要がある。また、楽器以外の様々な素材を用いる場合は、「素材による音色の違いの発見や表現方法の創意工夫」につながり、より豊かな感性や表現力、創造力を育むということである。

前述の本研究における創造性の視点や、先行研究によるこれらの示唆を踏まえつつ、保育現場における子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる体験とはどのようなものかを、テキストの事例より抽出し分析する。

II 研究方法

1. テキストの選択および分類

2008年以降に刊行された領域「表現」のテキスト類の内、手に入る限り集めたところ、35冊であった。その中から、子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる体験の事例が載っているもので取捨選択し、19冊を分析対象として抽出した。19冊それらの事例を数えると58件であった。

なお、2008年の改訂で強調された「友達の表現に触れたり、表現する過程を大切にすること」という中で、子どもは音・音楽を聴き、探索・探究する行為や行動が生まれやすいと考え、テキストの範囲を2008年以降刊行のものとした。

以下に、分析対象となったテキスト19冊と今回取り上げた事例の掲載ページを示す。

- また、テキストの並びは編著者の名前のアルファベット順とする。
- A 堂本真実子 (2018), 保育内容領域 表現 日々わくわくを生きる子どもの表現 わかば社 p.74, p.116
 - B 花原幹夫 (2009), 保育内容表現 北大路書房 pp.56-59, pp.79-80
 - C 今川恭子・志民一成・藤井康之・山原麻紀子・木村充子・長井寛子 (2016), 音楽を学ぶということこれから音楽を教える・学ぶ人のために 教育芸術社 p.77
 - D 今井真理 (2016), 保育の表現技術実践ワークーかんじる・かんがえる・つくる・つたえるー 保育出版社 pp.104-105
 - E 石上浩美 (2019), 新・保育と表現 嵯峨野書院 p.40, p.99
 - F 石井玲子 (2020), 表現者を育てるための保育内容「音楽表現」教育情報出版 p.50, p.117
 - G 小林紀子・砂上史子・刑部育子 (2019), 保育内容「表現」ミネルヴァ書房 pp.78-81
 - H 駒久美子・味府美香 (2020), 音楽表現 建帛社 p.39, pp.49-50, p.54, p.112
 - I 小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子 (2016), 乳幼児の音楽表現 中央法規 p.64
 - J 無藤隆・浜口順子 (2018), 事例で学ぶ保育内容領域表現 萌文書林 p.168, p.171, pp.178-179, p.181, p.221
 - K 野波健彦・板良数敏 (2009), 保育内容 表現 光生館 pp.40-41, pp.46-47, p.107
 - L 岡健・金澤妙子 (2019), 演習保育内容 表現ー基

礎的事項の理解と指導法ー 建帛社 p.77, pp.82-83

- M 岡本祐子・花原幹夫・汐見稔幸 (2020), 保育内容「表現」ミネルヴァ書房 p.82, pp.186-187
- N 島田由紀子・駒久美子 (2019), 保育内容表現 建帛社 p.16, p.125
- O 鈴木みゆき・吉永早苗・志民一成・島田由紀子 (2018), 保育内容 表現 光生館 pp.43-44, p.56, pp.160-161
- P 田澤里喜 (2019), 表現の指導法 玉川大学出版部 pp.67-69
- Q 徳安敦・関口明子 (2014), 生活事例からはじめるー保育内容ー表現 青踏社 p.40, p.96
- R 柳澤邦子 (2014), 領域「表現」子どもと楽しむための音楽表現ーのびのびと心と身体を育むー フレーベル館 pp.62-64
- S 横井志保・奥美佐子 (2018), 新・保育実践を支える 表現 福村出版 pp.97-98, p.101

III 結果

取り上げた58件の事例を何のために紹介されている事例なのか、どのような意図性を持った取り組みなのかを視点に、キーワードをつけながら分類したところ、「1. 音に気づいて聴く」「2. 音を聴きながら探索する」「3. 音を意図的につくる活動」「4. 楽器遊び」「5. 声の表現・歌の創作」「6. リズムや拍を楽しむ」の6つに分類することができた。細分化が必要と思われる項目については、さらに小項目を設け分析を行った(表1参照)。

以下に各項目について述べていくが、テキストにおいて対象年齢が記載されていない場合は各事例に年齢を記述していない。

なお、探求と書いている文献もあるが、幼稚園教育要領では「探究」という表記のため、テキスト類からの引用はそのまま引用するが、筆者の考察等で使用する場合は、「探究」という表記で示す。

1. 「音に気づいて聴く」

子どもが自分で発した音ではなく、自然や身の回りの音、外部から聞こえてくる音に対して聞き耳を立てるように聴き入っている事例を「音に気づいて聴く」とした。さらにそれを、(1)自然の音に気づく(2)身の回りの音に気づく、の2つに細分化したところ、12件該当した。

表2に示すように、静かに耳を澄ませ、じっと聴き入

り音の違いを感じ取ることなど、子どもにとっては、聴く行為そのものが遊びになり得る。また、耳は心の入り口であり、子どもは聴くことで想像力が喚起され、主体的に音に意味づけ、それを表現している。例えば、聞こえてくる音を擬音で表現しようとする、耳を傾けて集中して音を聴くようになる。聴いた音のイメージを言葉で表現することは、想像や連想の世界を豊かにし素敵な言葉を見つける機会になるであろう。自然環境は子どもの表現者としての感性を育み、保育室の中に展開される

活動とは別の豊かさと広範さと複雑さをもつものである。

表3に示すように、保育者が時には意図的に音楽が無い時間・環境をつくり、身近な音に意識を向けることも、子どもたちの感性を育む上で重要なことである。そうした場や音を聴くだけでなく、書きとめるという活動を行うことによって、子どもの五感を開き、環境への働きかけを促すことができるということが示唆されている。

表1 保育現場における子どもが音・音楽を聴き探索・探究する事例

事例の分類	事例の件数
1. 音に気づいて聴く (1) 自然の音に気づく (2) 身の回りの音に気づく	9件 3件
2. 音を聴きながら探索する	12件
3. 音を意図的につくる活動 (1) 身近な素材で音をつくる (2) 手づくり楽器をつくる	7件 3件
4. 楽器遊び	7件
5. 声の表現・歌の創作	14件
6. リズムや拍を楽しむ	3件

表2 自然の音に気づく事例

テキスト名	事 例
テキスト K	雨の日に竹に耳を当てて、竹の感触と音を確かめながら想像を広げる子どもの姿を紹介している。自然・もしくは自然的な環境は、音を介した表現者として学び・育とうとする子どもたちの感性を育む。そして、自然が子どもたちに対してもつ含意は、保育室の中に展開される活動とは別の豊かさと広範さと複雑さをもつと述べており、自然的な環境の子どもへの与える影響の大きさについて指摘している。テキスト A、テキスト D、テキスト O でも同じような事例が紹介されている。
テキスト C	子どもが巻貝を耳に当てて音を聴きながら、「海の音が聴こえる」「ここは海だー！」と叫び、巻貝の中に手を入れて何かを探ろうとする事例から、耳は心の入り口と位置付け、聴くことで想像力が喚起され、主体的に音に意味づけ、それを表現していると指摘している。
テキスト G	保育士が窓辺に飾りつけた風鈴のようなものに興味をもって集まってきた子どもたちに、音を鳴らしてみたところ、子どもが様々な擬音でその音を表現したり、「耳が気持ちよくなった」といった感想を述べたことを取り上げている。この事例から、聞こえてくる音を擬音で表現しようとする、耳を傾けて集中して音を聴くようになる。聴いた音のイメージを言葉で表現することは、想像や連想の世界を豊かにし素敵な言葉見つけの機会になるであろうと述べている。テキスト P も同じような事例を紹介している。
テキスト J	5歳児3人がドングリの木の下にじっと座り、落ちてくるドングリの音を聴き比べる様子を紹介している。ドングリが落ちる高さや、落ちる場所が土の上か枯れ葉の上でも音は異なる。「静かに耳を澄ませ、じっと聴き入りその違いを感じとるという遊び」である。
テキスト N	吉永 (2016) ¹⁵⁾ が述べる「音を『聴く』行為自体が、子どもの遊びとなり得る」 ^(注1) ことを踏まえて、次のような事例を紹介している。4歳児の自由遊びの場面において、聞こえてきた鳥の鳴き声に気づいた子どもの発言がきっかけとなり、散歩の折に聞こえてくる乗り物や風の音等にいち早く気付いて発言するといった音クイズが、クラスの散歩の一つの楽しみとなったという姿である。

表3 身の回りの音に気づく事例

テキスト名	事 例
テキスト R	4歳児クラスにおける、1分間目を閉じて周囲の音を聴く活動を取り上げている。「飛行機の音がした」「鳥が鳴いていた」「おなかの音がした」「この前の時より音が多い」など、自分達が音を聞いている間に起こった、様々な経験を保育者に話したり、友だち同士で話し合っている事例を紹介している。そこから、「時には意図的に音楽が無い時間・環境をつくり、身近な音に意識を向けることも、子どもたちの感性を育む上で重要なことである。(筆者による中略)乳幼児期は諸感覚を駆使して、さまざまな事物を自身の中に巧みに取り入れることができる時期でもある。また、諸感覚を通してさまざまな育ちを培う大切な時期である。そのような大切な時期に聴感覚の感性を磨く1つの取り組みとして、自身の周囲に存在する音に意識をもつことは、意義あることである」と述べている。
テキスト K	4歳児が園庭と園舎で聴き取った音を音のカードに書いて、園庭と園舎の音地図をつくる活動事例を示している。このように「保育者は自然を生かした場や活動をつくることによって、子どもの五感を開き、環境への働きかけを促すことができる」と述べている。テキスト M も同じような事例を紹介している。

2. 「音を聴きながら探索する」

子どもが、自分がモノに関わったことによって生まれた音を意識的に聴きながら、様々な音の鳴り方を探索している事例を「音を聴きながら探索する」とした。この

項目は12件該当した。

表4に示すように、身の回りの音に対して能動的に探索・探究するという活動は0歳児からすでに始まっているとされる。音を探索・探究するときには同時に耳を澄

表4 音を聴きながら探索する事例

テキスト名	事 例
テキスト J	乳児がミルクの空き缶など身近なモノに触って音を聴く姿や、0歳児男児がメロディーの鳴る音の玩具を自分で取り出し、転がして音を鳴らして遊ぶ姿を紹介している。これらの事例から、「0歳児であってもさまざまな生活の音、保育者の声、玩具の音に敏感に反応して、能動的に音を探索していることがわかる」と述べている。
テキスト A	子どもが雨を含んだ芝生や水たまりで足踏みをして音の違いを楽しんだり、氷が張れば割ったり擦ったりする音に耳を澄ませる姿を紹介している。これらの事例から、「耳を澄ます」ことは「聴く」「感じる」「イメージする」などが含まれ、耳を澄ましはじめると、子どもは自らとらえた音・音楽のイメージに基づき音の鳴るものと向かい合うと指摘している。テキスト O、テキスト M でも同じような事例が紹介されている。
テキスト H	年中児が太さや長さ、種類の異なる竹を手に取り、口に当てて吹く、床に打ちつける、耳元に持ち会話する等、思い思いに探り始めた姿を紹介している。この事例から、「見立てる、叩く、振る、打ち付ける等の活動から生じる表現や音を楽しんでいる様子が読みとれる」と述べ、「子どもは初めての素材と出会うと、その素材がどんなものであるか、手で触ったりしながら興味・関心をもっていく。『面白い』『やってみよう』と好奇心が芽生え、その素材を工夫してイメージを膨らませていく」と指摘している。
テキスト E	「子どもたちが遊びのなかで、しっかりと耳を澄ませ、環境と対話し、音を遊びに取り入れ、友だちと表現を共有している」姿を紹介している。具体的には、雨上がりの園庭に長靴を履いた女児が、「ペッチョンペッチョンだ」と踏みしめた泥の感触を言い表しながら、大きな水たまりにわざと音を立てて歩いている。しばらくしてやってきた男児も、女児と同じ速さ・同じリズムで音をたてるという事例である。 また、音の色や音の景色を心の目で見るという別の事例では、色水遊びをしながら、自分たちがつくった色水にあったピアノの音を探して遊んでいる子どもの姿を紹介している。この事例から、音を感じるのは聴覚だけではなく、見ることもできると述べている。
テキスト J	5歳児男児二人組がプラスチック容器、発砲スチロール等、雨が当たる素材によって音が違うことに気づき、雨の音を感じながら探索している事例を示している。 また、5歳児男児がラップの芯を耳に当てたり離したりしながら、その音の変化を楽しんでいる姿を紹介している。「音の観察は、自ら対象に働きかける行為を促す。なぜ、音が違うのかと考え、確かめようとする。音を観察することで、子どもの探求心はどんどん広がり、その探求心が表現の工夫や連想の広がりにつながっていく」と述べている。

まして「聴く」という行為が行われ、音を感じたりイメージしたりすることを伴いながら、音と向き合うようになっていく。また、子どもは遊びの中で、しっかりと耳を澄ませ、環境と対話し、関わり方を工夫しながら音を遊びに取り入れ、友だちと表現を共有するようになる。そうした遊びのなかで、子どもが音を感知するのは聴覚だけではなく、視覚を使うなど他の諸感覚も働かせながら音をとらえていることが示唆されている。

3. 「音を意図的につくる活動」

子どもが音を意図的につくっている事例を「音を意図的につくる活動」とし、さらにそれを、(1) 身近な素材で音をつくる (2) 手づくり楽器をつくる、の2つに細分化したところ、10 件該当した。以下に詳細を述べていく。

表5に示すように、音をつくる際に重要なことは、子どもが五感を十分に使い、ものを探求し、フィードバックし、イメージをもつことや、友だちの音にも意識を向けていく過程にある。また、遊びにおいて年長者の振る舞いを見てまねることで、表現の型や技術の学びも急速に進む。さらに、子どもがモノとかかわるときに生じる音に気づき、音を楽しむとき、それは音を通して環境への認識を深めている時でもあるが、音が生じるモノとして、常に「楽器」にこだわる必要はなく、子どもにとっ

て何が、どのような状況で「楽器」になり得るのか、広い視野から考えていくことが重要であると指摘している。

又、表6に示すように、子どもが「手づくり楽器」をつくる意義とは、自分たちで工夫して好きな形の楽器をつくることができることや、素材の組み合わせや、振り方の工夫でさまざまな音が出せるということである。そして、子どもたちが積極的に音づくりに関わり、音に耳を澄まして、自分なりの心地よい音を探していくことである。また、そうした音探しにおける、聞く、比べる、試すという一見個人的に見える行為も、実は、友達に見たり見られたりしながら、互いに影響し合うことで活性化する。さらに、子どもたちが楽器をつくる際には、本物の楽器の発音の仕組みが音作りのヒントになるため、その仕組みを子どもと確認することや、子どもの発想が豊かに展開されるよう、さまざまな廃材を用意することで多様な音色の楽器が製作可能となる。

4. 「楽器遊び」

子どもが楽器で音を鳴らして遊ぶ事例を「楽器遊び」とした。この項目に該当するのは、7 件であった。

表7に示すように、2 歳児が楽器を鳴らすには、まず、自分の身体が楽器とうまく協応することが大前提となるが、4 歳児になると、子どもたちが心の中のイメー

表5 身近な素材で音をつくる事例

テキスト名	事 例
テキスト A	家庭から持ち込まれたフライパン、陶器やガラスなどの生活用品や竹材や木材などの素材にかかわり、音を試して快・不快を聴き分け、気に入った音を選び、並べ替えたり奏法や鳴る仕かけを工夫している事例を取り上げている。
テキスト F	5 歳児の音遊びの事例として、ビー玉、小豆などの素材、廃材、自然物を容器に入れて叩いたりしながら音を試す姿を取り上げている。さらに、そこから友だちと協力し試行錯誤しながら花火の音をつくり出す遊びへと広がっていったことを加えている。この事例から、「重要なことは、保育者からの指示に従うのではなく、子どもたち自身が『どんな音がするのかな』と想像を膨らませ、音とかかわりながら試行錯誤し、友だちの音にも意識を向けていく過程である」と述べている。同じような事例を、テキスト O も紹介している。
テキスト K	5 歳児の祭囃子の練習を見ていた 3 歳児、4 歳児たちが、手近の大積み木を叩いて真似をしたり、太鼓の胴に手をあてて振動を感じている様子を示している。この事例から「五感を十分に使い、ものを探求し、フィードバックし、イメージをもち、一対一の人間関係から次第にかかわりのネットワークを広げる。こうしたことが保障される環境の中で、子ども達は表現の基盤をますます盤石なものにしていく。年長者の振る舞いを見てまねることで、表現の型や技術の学びも急速に進む」と示唆している。テキスト Q も同様の事例を紹介している。
テキスト I	ままごとの道具で音を鳴らす子どもの姿から、「子どもが、モノとかかわるときに生じる音に気づき、音を楽しむとき、それは音を通してモノの特徴をとらえることでもあり、音を通して環境への認識を深めていることでもある」と述べている。また、「子どもと音・モノとのかかわりを深めるためには、必ずしもいわゆる『楽器』にこだわる必要はないだろう。子どもにとって何が、どのような状況で『楽器』になり得るのか、広い視野から考えていくことが重要である」と指摘している。テキスト J も同じような事例を示している。

ジを伝え合ったり共有したりしながら、協同して創意工夫を凝らした表現をつくりあげることができるようになっていく。また、乳幼児期に多様な楽器に自らの手で触れ、音楽を奏でることは、楽器への探求心を促し、子どものもつさまざまな表現を育むきっかけになることか

ら、日常の環境の一つとして楽器が置かれていることが大切である。さらに、楽器を演奏する際には、通常の演奏法にとどまらず、様々なモノを用いることで不思議な音に出会ったり、音を探求するきっかけになるのではないかと指摘している。

表6 手づくり楽器をつくる事例

テキスト名	事 例
テキスト B	クラス活動において5歳児が手づくりマラカスをつくる事例を示している。紙コップをつなげたなかに米、小豆、大豆、ビーズ、ひまわりの種、どんぐりなどさまざまな素材を、子どもたちが自由に選びつくった後、振り方を工夫して、思い思いの鳴り方を楽しむ姿を紹介している。この事例から、「手づくり楽器のよさは、自分たちでくふうして好きな形の楽器をつくることができることや、素材の組み合わせや、振り方のくふうでさまざまな音が出せるということであろう。子どもたちが積極的に音づくりに関わり、音に耳を澄まして、自分なりの心地よい音を探していくことに意義がある」と述べている。
テキスト S	年中児の手作り楽器による音の探索を紹介している。最初は、音具（手作り楽器）を振る、転がす、手でたたく、音具同士を打ち合わせるなどしながら、どんな音が出るのか、どのように鳴らすことが可能なのかを理解しようとする。また、自分の音だけでなく、友達の出す音も気になる。新しい音が聞こえると、みんながその音を出している子に注目し、その子の手から音具が離れると、すぐに次の子が持とうとする。似た形をした音具を順に鳴らして聴き比べ、気に入った音のする音具を見つけて喜んだりする。この事例から、これらの表現が見られた背景として、見た目は同じでも、中身やその量を少しずつ変えた音具が多数あったことと、そして友達の存在である。聞く、比べる、試すという一見個人的に見える行為も、実は、友達に見たり見られたりしながら、互いに影響し合うことで活性化すると述べている。
テキスト J	子どもが廃材で手づくり楽器を製作し、つくった手づくり楽器から微細な音の変化に気づいている姿を紹介している。この事例から、本物の楽器の発音の仕組みが音作りのヒントになるため、その仕組みを子どもと確認し、子どもの発想が豊かに展開されるよう、さまざまな廃材を用意することで多様な音色の楽器が製作されると述べている。

表7 楽器遊びの事例

テキスト名	事 例
テキスト A	2歳児がたいこ、鉄琴、カスタネット、マラカス、鈴の中から思い思いに楽器を手にし、ひたすら音を出して確かめながら、音が鳴ることの喜びを感じている姿を紹介している。この事例から、「全般的に、どの子どもも音を聞いて、自分の身体を調節する様子が見られました。（引用者による中略）まず、楽器を鳴らすには、身体が楽器とうまく協応することが大前提であることがわかります」と述べている。
テキスト F	「日常の環境の一つになっている楽器」という事例を取り上げている。具体的には、保育室と園庭につながるテラスの一角にタンブリンやカスタネット、擬音楽器や民族楽器が置かれてあり、それらを子どもたちが自由に手にし、生活の一部として楽器遊びをしている姿である。この事例から、「乳幼児期に多様な楽器に自らの手で触れ、音楽を奏でることは、楽器への探求心を促し、子どものもつさまざまな表現を育むきっかけとなります」と述べている。テキスト S も同じような事例を紹介している。
テキスト K	子どもたちが心の中のイメージを伝え合ったり、共有したりしながら、協同して表現をつくりあげる事例を紹介している。4歳児数人は、クラスで飼育している亀にハンドベルを聴かせようということで意見が一致し、1音ずつベルを鳴らしながら、互いにタイミングを調整したり、ベルを鳴らす順番を変えたりしていた。その様子があたかも音の作品づくりのようであったという内容である。この事例から、「この頃には、明確な意図に基づいて創意工夫を凝らした表現をつくり出そうとしたり、よりよい表現を求める姿も見られるようになる」と述べている。テキスト G、テキスト S でも同じような実践事例が紹介されている。
テキスト H	年長児が爪の代わりにフォークや箸等を用いて琴に触れながら、音の違いを確かめ楽しんでいる様子などを紹介している。「モノを使って新たな音を探す」というこの事例から、通常の演奏法にとどまらず、このように様々なモノを用いることが不思議な音と出会い、音を探求するきっかけになるのではないかと指摘している。

5. 「声の表現・歌の創作」

子どもが声の表現を楽しんだり、つくりうたや替え歌をつくって遊んでいる事例を「声の表現・歌の創作」とした。この項目に該当するのは、14 件であった。

表 8 に示すように、2～4 歳頃には子どもたちが自ら歌をつくる「つくりうた」の場面を見ることができる。それは、言葉を拍節的に唱えることであったり、擬音語や擬態語を用いて話すことであったり、あるいは言葉の

表 8 声の表現・歌の創作の事例

テキスト名	事 例
テキスト H	自由遊びの場面における、2 歳の子どもによるつくりうたを紹介している。絵を描きながら「どんぐりころころ」を歌っているが 1 番の歌詞最後の箇所を「こっちゃん一緒に遊びましょう」と、自分の愛称に替えて歌っている姿である。この事例から、「2～4 歳頃には子どもたちが自ら歌をつくる『つくりうた』の場面を見ることができるが、それは自由遊びの中で自然にその時の感情を表すものであったり、見たもののイメージを声にして楽しむものである」と述べている。
テキスト B	みずからの動作に合う擬音語を唱える事例として、4 歳児がプリンの容器を 1 つずつ手でたたきながら数えたあと、自身の手の動きに合わせて、「タップタップタップタップ…」とリズムカルに唱える様子を示している。この事例について、子どもが「言葉のリズムを手がかりにみずからの動作をまとめていることがわかる」と述べている。 次に、ままごと遊びのなかで見られた音楽的な表現として 3 歳児、4 歳児が友達の言葉のリズムを模倣しながらつくりうたを歌っている姿を紹介している。これらのように、「子どもたちは遊びのなかでさまざまな音楽的な表現をしていることがわかる。それは、言葉を拍節的に唱えることであったり、擬音語や擬態語を用いて話すことであったり、あるいは言葉のリズムに合わせて動きをまとめることであったりというような、原初的な音楽的表現ということができる。そしてこのような表現は、歌を歌ったり楽器を演奏したりする行為とけっして関わりのないことではなく、連続性のあるものなのである」と指摘している。テキスト O、テキスト J も、同じような事例を紹介している。
テキスト J	5 歳児の「やまのおながくか」を土台とした替え歌遊びの事例を示している。同曲に登場していない新たな動物と、その動物が奏でる楽器の音を考えて歌う事例を紹介している。こうした「音楽表現遊びのなかで、音の連想を思考する機会をもつことによって、ふだんの生活や遊びのなかにおいて、ものの音や自分の出す音に気づくことが増えるのではないだろうか」と述べている。また、「気づいた音に対して、おもしろいと思ったり珍しいと感じたり、何に似ているかと連想したりする『音』を巡っての思索は、子どもの感性を育み表現を豊かにする」と述べている。
テキスト L	5 歳児が、自分でつくった歌詞を書きとめてメロディーをつけながら、繰り返し歌っている姿を紹介している。この事例を受けて、歌詞だけとはいえ、書きとめて表現を形にして残そうとしたところは、2、3 歳ごろの独り言のような歌とは、表現意図の自覚の点で大きな違いがあると指摘している。書きとめておけば再現が可能になるということから、本人にとっては、「その曲が完結性をもった『作品』として認識されている」とも述べている。
テキスト R	「子どもたちの生活の中には、様々な場面で自発的な音楽表現が存在する」事例として、以下の 2 つを紹介している。昼食前に 4 歳児が「ヤッホー」のリズムを変化させながら「山びこごっこ」を掛け合いして楽しんでいる姿や、5 歳児が園外の散歩時に「まっかなあき」の替え歌を歌いながら、今自分達がいる「情景を歌で表現する」様子である。テキスト E、テキスト L でも同じような事例を紹介している。
テキスト K	5 歳児が 1 年近くに及ぶ稲作の取り組みと日々の生活を振り返り、オリジナル曲「ようちえんのうた」を作詞作曲した姿を紹介している。この事例から、「自分たちの取り組みを振り返り、言葉を選び、歌に表すことで、その時々を思いを共有したり、稲作以外の生活を思い出したりしながら、互いのつながりを意識できる表現活動であった」ことを指摘している。
テキスト Q	5 歳児女児が 2 階にある保育室で朝の支度の際に、友だちが階段を上がる足音に合わせて「〇〇君の足音はドンドンドン」と節をつけて歌い始めたことがきっかけで、他の子どもたちも次の足音は誰かなと耳をそばだてている。足音が聞こえると「〇〇君の足音はドンドンドン」と歌い、そして本人だと「ピンポン」違うと「ブッ」と全員が登園しおえるまで、その遊びが継続した姿を紹介している。この事例から、「一人の子どもが発したつくり歌と一緒にみんなで共有することで、動きと言葉が拍に乗ってリズムカルな歌へと変容していった。そしてこの歌を通してクラスの子どもたちの中で音楽的コミュニケーションが図られていることがわかる」と述べている。

リズムに合わせて動きをまとめることであったりという
ような、原初的な音楽的表現とすることができる。そして
このような表現は、歌を歌ったり楽器を演奏したりする
行為とけっして関わりのないことではなく、連続性の
あるものであると指摘されている。また、音楽的表現の
発達の見点からは、自分のつくった歌の歌詞だけでも書
きとめておこうとした5歳児と、2、3歳ころの独り言
のようなたでは、表現意図の自覚の点で大きな違いが
あり、本人にとっては、その曲が完結性をもった「作
品」として認識されているという指摘がある。さらに、
5歳児では日々の生活とのつながりのなかで、子どもた
ちがその時々を思いを共有し、互いのつながりを意識で
きる表現活動として集団でのうたづくりの姿も見られる
ようになる。

6. 「リズムや拍を楽しむ」

子どもがリズムや拍を楽しみながら音楽をつくって遊
んでいる事例を、「リズムや拍を楽しむ」とした。この
項目に該当するのは、3件であった。

表9に示すように、子どもたちは、拍やフレーズを瞬
時に感じとりながら自分でリズムを考え、いろいろな部
分を叩く等、思考力や表現力を存分に発揮しながら、即
興的な音楽表現を生み出している。アンサンブルとは、
音を介した対話を経験することであるが、重要なこと
は、他者とのイメージや表現を共有し、楽しむことであ
る。加えて、音を介した会話は即興的であり予測不可能
と協同という側面で成り立っている。だからこそ、お互
いの音をよく聴き合い、それに応えようとする必要があ
り、そこに即興的な新たな展開が生まれると指摘してい
る。

Ⅳ 考察

Ⅳ－1. 各論のまとめ

以上の結果についての考察を以下に示す。

1. 音に気づいて聴く

(1) 自然の音に気づく

「耳は心の入り口」と記されたように、子どもが自然
の音に耳を澄ませることが、気づいたり感じたり、イ
メージを広げ自ら音をつくったり表現することすべての
起点になっていると考えられる。また、生活や遊びのあ
らゆる場面において、子どもが多様な自然の音に耳
を傾け、自らの感性を育んでいるということがわかる。

(2) 身の回りの音に気づく

子どもの聴く力の育みは、子ども自身の営みだけでは
なく、保育者の音環境への気づきや関心と関連すること
がわかる。また、自分の周りの様々な音を聴いたりそれ
を何等かの形で記すことは、聴く力を育て、音とイメ
ージを結び付けていくことにつながっていくと考えられ
る。

2. 音を聴きながら探索する

0歳児は自分とモノとの二項関係の中で、音を探索・
探究しているが、成長するとともに、自分とモノ・コト
と友だちという三項関係の中での探索・探究が始まるこ
とがわかる。それに従い、表現が豊かになったり、社会
性の育ちが促されると考えられる。また、音を探索・探
究することは、「聴く」という行為を土台に、音を感じ
たりイメージしたりすることも伴うことから、その過程
において子どもの感性や創造性を育んでいると考えられ

表9 リズムや拍を楽しむ事例

テキスト名	事 例
テキスト H	年長児が自然素材の貝を歌の伴奏楽器として使い、友達と拍やリズムを即興的に刻みながら「かえるのうた」を歌った事例を紹介している。子ども達の姿は、拍やフレーズを瞬時に感じとりながら、自分で選んだ貝でリズムを考え、いろいろな部分を叩く等の奏法を工夫しながら表現している。つまり思考力や表現力を存分に発揮しながら、即興的な音楽表現を生み出していると指摘している。
テキスト H	自由遊びの場面で、5歳児男児二人が机の音でアンサンブルを楽しむ姿を紹介している。追いかけっこをしていたH児とI児が机を挟んで止まった状態になり、H児がI児を驚かそうとするように机を一発叩いた。I児もそれに応えんとばかりに叩き返す。そのうちに、それまで手のひらで強く叩いていたのが、手の甲の部分で滑稽な音を出そうとする等、保育者から止められるまで音での会話が繰り返された事例である。アンサンブルとは音を介した対話を経験することであるが、重要なことは、「他者とのイメージや表現を共有し、楽しむことである」と述べている。
テキスト N	自由遊びの場面で、4歳児女児二人がカスタネットで行った事例を紹介している。二人の会話のやりとりには予測不可能な部分があったが、だからこそ、お互いの音をよく聴き合い、それに応えようとする必要があり、そこに即興的な新たな展開が生まれたといえる。即興的な会話は、他者との協同によって創造的に生み出されていることがわかると指摘している。

る。さらに、子どもが聴覚だけではなく、五感を十分使って音をとらえることは、音をつくったり表現する上での素材を幅広く知ることにつながるのではないと思われる。

3. 音を意図的につくる活動

(1) 身近な素材で音をつくる

子どもは、生活の中にある身近な素材を自らの主体的なかかわりによって、「楽器」として楽しんでいることがわかる。素材に対して、色々試しながら自由に関わっていくことで、子どもは、素材の特徴や素材へのかかわり方と、音の質や音色等に関係があると気づくであろう。その経験は、手づくり楽器を創作したり、楽器を演奏したりする場面でも活かすことができると考えられる。また、友だちの音にも耳を傾けていくことで、多様な音の捉え方や表現方法を知るきっかけとなり、自身の音の探索・探究はさらに深まると推察する。

(2) 手づくり楽器をつくる

手づくり楽器の創作には、素材の種類や量を変化させたり奏法を工夫することで、幾通りもの音色がつくり出せる面白さがある。また、子ども自身の手のサイズにあったものをつくるので、使いやすく、自分の思う表現が存分にできると考えられる。定型的なものではなく、正しい音程や正しい演奏法という括りでの評価が存在しないため、子どもの音を探索・探究する意欲が高まると考えられる。さらに、自分とは違う仲間の音や表現に影響を受けることによって、新たな音や表現をつくり出すきっかけになると考えられる。

4. 楽器遊び

子どもの成長発達に伴い、楽器の音に対する探索の姿には段階があることがわかる。例えば2歳児の場合は、自分の身体と楽器との協応を土台に、楽器の音そのものに対する興味関心をもとにした探索であったが、4歳児になると、仲間を交えた楽器とのかかわりのなかで、自分たちが描くイメージの音をつくり出すための意図的な探索・探究が行われていることがわかる。

また、楽器の捉え方においては、〈楽譜に書かれた楽曲を演奏するためのもの〉という、狭義の捉え方ではなく、音をつくる素材という大きな括りで捉えることが重要である。日常の遊びの中で、子どもが様々な楽器に触れ、自由に音を探索・探究することが、器楽表現へのアプローチにもつながると考えられる。

5. 声の表現・歌の創作

子どもが歌をつくるのは、日常からかけ離れた特別な

ことではなく、生活や遊びの場面で心動かされ感じたままを声にして楽しむことを土台としていることがわかる。また、一見芸術的な観点からは音楽と判断されにくい素朴な声の表現も、原初的な音楽的表現であり、後々の音楽活動と連続性のあるものという見方は、大人が子どもの音楽的表現を援助・指導する上で非常に重要な視点であると考えられる。

また、集団でのうたづくりは、自分の思いを表現したり友だちの思いを受け止め共有するなどの体験が伴うことから、社会性の育ちを基盤としたスケールの大きいうたづくりが展開されると考えられる。

6. リズムや拍を楽しむ

音・音楽をつくる上で、即興性や応答性が重要な要素となっていることがわかる。即興性や応答性については、ハードルが高く難しく捉えられる場合もあるが、音楽を介した即興的な会話は、日常生活で交わされる会話と相似しているため、子どもにとっては特別なことではなく、遊びの中の一つと捉えているのかもしれない。また、単独ではなく協同でつくり出すからこそ創造性や表現力がより豊かに育まれ、音から音楽づくりへと発展していくと考えられる。

以上の考察を踏まえて、創造性を育む音・音楽にかかわる子どもの姿とは、日常生活や遊びとのつながりの中にあり、耳を澄ませて五感を働かせながら環境との対話を軸に、音の探索・探究を楽しむことであると確認できた。

子どもたちは、多様な素材に主体的にかかわりながら「どうすれば、音が鳴るのだろうか」「どうすれば、よりよい表現になるのだろうか」といった問いを立て、自分たちなりの創意工夫を凝らす過程において、様々な力を身に付けていることがわかる。

例えば、テキストJの0歳児の子どもの事例にみられる、自ら積極的に身の回りのものに働きかけ、音の探索を繰り返す姿は、保育所保育指針の第2章1乳児保育に関わるねらい及び内容の(2)－ウ「身近なものに関わり感性が育つ」に相当する力が育まれていると考えられる⁷⁾。身体の諸感覚と音が出ることとの関係性に興味をもち、何度も試す面白さや楽しさを感じている様子が見えてくる。モノにふれることは、音をよく聴くことや気づくこと、感じること等が同時に含まれ、音に親しむ経験となる。その一音一音を感じる体験が子どもの感性を育み、後々の音楽表現へとつながるため、いつでも子どもが音に向かえるような環境づくりが必要であると考えられる。

他方、3歳以上の子どもの事例では、明確な意図のもと自分のイメージした音や連想した音を探索することや、自分－モノ－友だちという三項関係の中での音づくりが始まることが確認できる。

例えば、4歳児数人が、クラスで飼育している亀にハンドベルを聴かせようとするテキストKの事例では、個々でアイデアを考え「思考力の芽生え」、そのイメージを共有するために「言葉による伝え合い」を行い、1音ずつ音を担当するという責任感を持ちながら「自立心」、表現における工夫を凝らしている「豊かな感性と表現」。その様子があたかも音の作品づくりのようであった「協同性」。というように、友だちとイメージを共有し、音から音楽へと創造する過程において、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の育ちが見受けられた。また、テキストHの4歳児の事例に見られる、友だちとカスタネットを叩きながら即興的にリズムをつくり出す表現なども、創造性を育む応答的な遊びである。制約のない音を介した会話を経験する中で「思考力」や「表現力」「コミュニケーション能力」を養いながら、自由に音楽をつくり合う力を育んでいる。このように、3歳以上の事例では、友だちと協同することで、多様な考え方や表現に気づき自らの感性を育みながら、より複雑でダイナミックな創造を遊びの中で展開していることがわかる。

Ⅳ－2. モデル図の提案－子どもが音・音楽を聴き探索・探究する保育現場の事例から－

これまでの知見を踏まえて、子どもが音・音楽を聴き探索・探究する中で創造性がどのように育まれていくかを整理すると、図1のように3つのフェーズ（原初的・探索・探究の3つ）が見出された。なお、「表1 保育現場における子どもが音・音楽を聴き探索・探究する事例」の分類の項目1. 音に気づいて聴く、2. 音を聴きながら探索するに関する知見は、〈音を感じる・気づく〉に、3. 音を意図的につくる活動、4. 楽器遊び、6. リズムや拍を楽しむに関する知見は、〈音を意図的につくる活動〉に、5. 声の表現・歌の創作に関する知見は、〈声の表現・歌の創作〉に含め考察を行った。3つのフェーズを見てみると、創造性を育む音・音楽にかかわる体験の原初的なフェーズは、生活や遊びの中で、子どもが音に気づいて知る段階であり、耳を澄まして聴くという行為の出発点である。声の表現においても心動かされ感じたままを声にして楽しむ段階であり、何か目的をもってつくろうとしたものではない。しかしながら、子どもが身の回りや自分の声という環境に向けて、興味関心をもちながら動き出す一歩は探索の始まりであり、

表現の始まりでもある。このような中で創造性の芽生えが生まれてくると考えられる。

ジョン・ペインター (1992)¹²⁾ は、創造性と聴くことの関係性について、「音楽的な創造性にとって何よりも重要なのが、“よい耳”をもつことであり、もし注意深く音楽を聴くという技術を養えば、音楽経験からさらに深い意味をえることができる」と述べている。このように、注意深く聴くことを基盤に、感じたままに表してみる体験が継続する過程において、徐々に探索のフェーズに移行すると思われる。そのため、大人が見落としてしまいがちな子どもの気づきや自ら行っている姿を、丁寧に読み取ることが肝要である。

探索のフェーズは、自分の身の回りにどのような音があるのかを五感を使って探索し、意図的に音を聴いたりつくったりする段階である。そうしたなか、多様な素材に触れ様々な音を感じたりイメージしたりすることや、音の工夫を自分なりに行うことで、感性や創造性を育むと考えられる。また、この時期には、友だちのつくった音や声が、音をつくることの要素に加わることから、人間関係の広がりや創造性の育みに関連が見られる。さらに、声の表現ではつくりうたが始まるが、原曲の力を借りたり友だちの表現を模倣することで創造性を育んでいる。鈴木 (2018)¹³⁾ が述べるように、模倣は創造の一つの段階でもあり、他者とのかかわりを活発化する力をもっていることから、友だちのリズムを真似ながら新しいアイデアに触れて遊ぶうちに、自然と独自のリズムが創造されることが考えられる。

こうした探索のフェーズが深まりながら探究のフェーズに移行されていくが、この2つは非常に密接で、場合によってはほぼ同時に行われていることもあると考えられる。

この時期は、明確な意図のもと、仲間と協同する集団での音・音楽づくりが始まるが、自分たちの表現がより楽しいものになるように、あるいは自分たちのイメージや連想することに近づける音を見つけるためにお互いの音を注意深く聴きながら、探索・探究が行われるようになる。駒 (2013)⁵⁾ は、子どもの集団における即興的な音楽活動において、子ども一人一人の表現が集団のなかで受け入れられ互いに応答していくことで、新たな創造性を生み出していると示唆している。このことから、集団により育まれる創造性によって豊かな創造的体験が生み出される姿を、探究のフェーズに見られるのではないかと考える。

以上のように、図1では、子どもの創造性を育む音・音楽にかかわる体験を、原初的なフェーズ・探索のフェーズ・探究のフェーズと3つのフェーズに示した

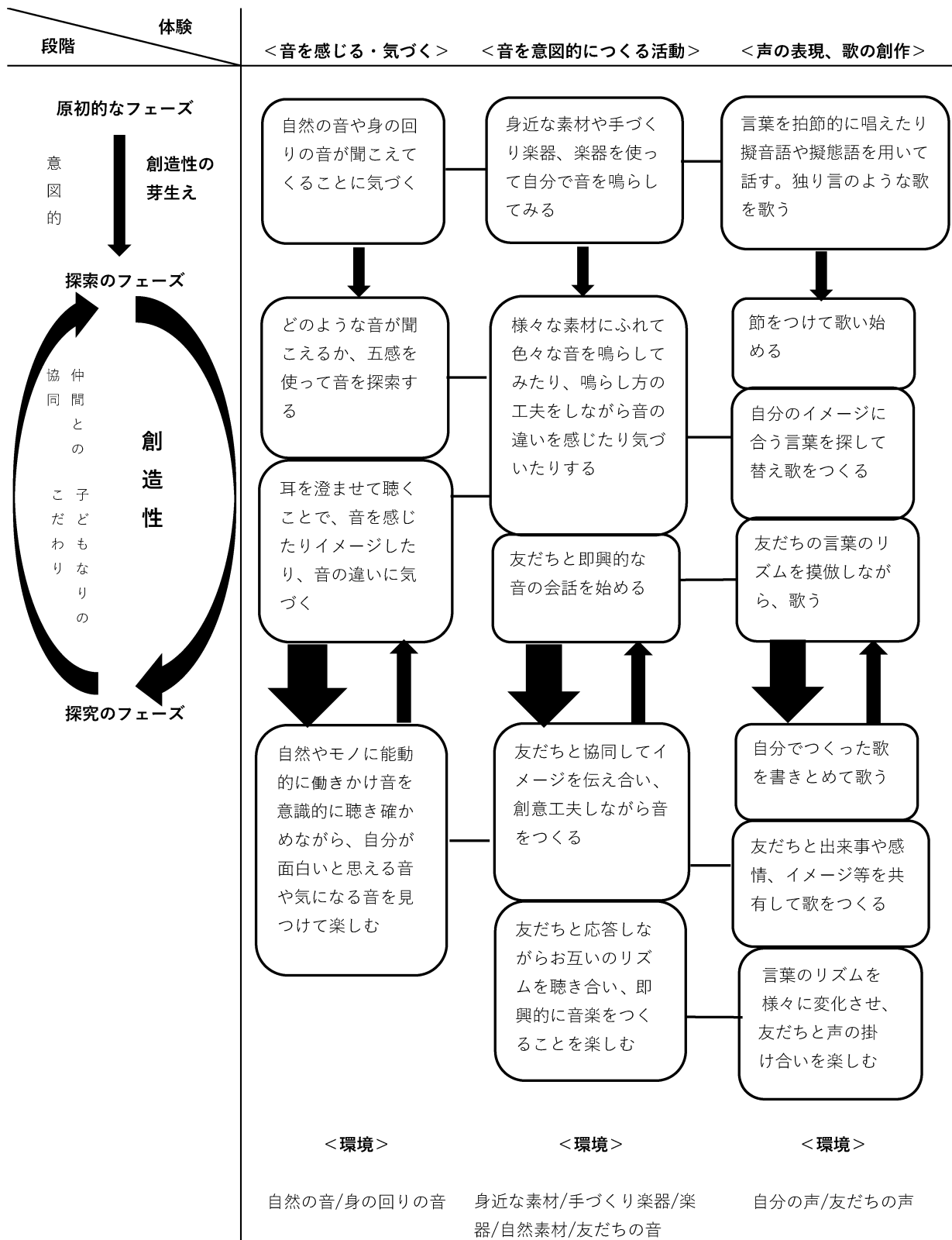


図1 保育現場における子どもの創造性を育む3つのフェーズ

が、これらはそれぞれがはっきりと分かれているわけではなく、重なり合っている部分もあり、なだらかな段階と考えられる。このなだらかな段階にそって、体験を連続的に積み重ねていくことで創造性が育まれると考えられる。また、これらの体験の土台には、環境との対話が常にあり、子どもが環境に能動的に働きかけ、また、環境からの働きかけによって、音の探索・探究は深まると考えられる。日常生活とのつながりを大切にしながら、音を聴くことを中心に音を探究しつくり出すことを繰り返す中で、子どもの創造性は育まれると考えられる。

伊原(2020)²⁾は、年少から年長までの3年間、子どもがある楽器を自由探索した記録において、3つのフェーズと同様の論点をもって整理している。そのため、モデル図を提案するにあたり、伊原(2020)の知見をベースにして検討を行った。

一例として、子どもの創造性がどのように育まれるかを、3つのフェーズを踏まえて挙げるとすると、次のように示すことができる。

6.「リズムや拍を楽しむ」に示した、友だちと机を叩きながら即興的にリズムをつくり出す、テキストHの5歳児の事例を例にとる。まず、H児がI児を驚かそうとするように机を一発叩いたことで、その音に触発された部分は〈原初的なフェーズ〉、I児もそれに応えんばかりに叩き返し、H児とのリズムの応答が始まった部分は〈探索のフェーズ〉、さらに、手のひらで強く叩くだけではなく、手の甲の部分で滑稽な音を出そうとする部分は、〈探究のフェーズ〉に移行していると捉えることができるだろう。

Ⅳ-3. 学生が領域「表現」の指導法において理解しておくべきこと

以上のような考察を踏まえて、領域「表現」の指導法について学生が理解すべきことはどのようなことであろうか。子どもの感性や創造性を育む第一歩は、自然や身の回りのものに耳を澄ませて音を聴くことであり、その過程で気づいた音に興味を持って探索・探究できるような環境構成の重要性がテキストの事例より明らかになった。子どもがモノと様々なかかわりをしながら、自分なりの音や音楽をつくり出す魅力的で多様な素材の準備と、素材を試したり創意工夫したりする場や時間の保障が必要である。また、子どもなりのイメージや発想、こだわりなどがあるため、決して教示的にならず、子どもが意欲的に音・音楽にかかわる体験ができるように援助することが大切である。そのためにも、子どもの表現を受け止めながら、子どもが今、どのフェーズの中で体験をしているのかを理解し、支えていくことが大切であ

ると考えられる。

今後の課題

今回の調査分析により、保育現場における、子どもの感性や創造性を育む音・音楽にかかわる体験とはどのようなものかを明らかにすることができた。子どもは、日頃の生活や遊びの中で、環境にかかわり音を聴き様々な工夫することを楽しみながら、自らつくり出す力を育んでいるのである。一方で、創造性の育みは子ども同士の表現だけでは十分でないという側面があり、特に、乳児の場合には保育者とのかかわりが大きな影響を与えると考えられる。2008年以降に出版されたテキストにおいても、そうした数多くの事例が認められた。創造性を育む保育の在り方や、音・音楽にかかわる保育者の援助・指導の方法など、学生が領域「表現」の指導法を学ぶ上で重要な手掛かりが記載されていたが、紙幅の関係により、今回記述することはできなかった。そこで、今後の課題として、子どもと保育者がともに音・音楽をつくる事例に焦点をあて、子どもの創造性を育むための保育者の声かけや、音楽的な援助、指導法を明らかにしていきたい。

(注1)

吉永は、子どもは遊びのなかでモノの音をさせたり、それらを聴いておもしろがっているというだけでなく、その場の響きそのものを遊びに取り入れているのではないかという仮説を検証するために、子どもの遊びを観察し、結論づけている。

文献

- 1) 赤津裕子(2014). 第6章楽器を弾く活動の展開例 三森桂子・小島エマ(編)音楽表現 一藝社、pp.63-72.
- 2) 伊原小百合(2020). 楽器を自由探索する幼児の縦断的観察－キッズジャンベの遊び方の変遷に着目して－ 保育学研究、第58巻第23号合併号、pp.81-92.
- 3) 井本英子(2018). 第13章音楽と物語の融合 渡辺厚美・岡崎裕美(編)音楽表現 一藝社、pp.105-112.
- 4) 高地誠子(2020). 第6章音で楽しむ音楽表現 上野奈初美(編)表現指導法 萌文書林、pp.86-97.
- 5) 駒久美子(2013). 幼児の集团的・創造的音楽活動に関する研究－応答性に着目した即興の展開－ ふくろう出版、pp.150-151.
- 6) 高奈奈(2017). 子どもの創造性を豊かにする音楽表現活動 神戸親和女子大学児童教育学研究、36、45-54.
- 7) 厚生労働省(2017). 保育所保育指針 フレーベル館
- 8) 文部科学省(2008). 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 9) 文部科学省(2017). 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 10) 西島千尋(2014). 第7章音楽を聞く活動の展開例 三森桂子・小島エマ(編)音楽表現 一藝社、pp.73-82.
- 11) 奥美佐子(2018). 第4章「表現」の保育 9節イメージ

- と表現 横井志保・奥美佐子（編）新・保育実践を支える表現 福村出版、pp.129-135.
- 12) Paynter, J. (1992). *Sound and Structure*, Cambridge University Press. 坪能由紀子（訳）(1994). 音楽をつくる可能性－音楽の語るものⅡ－ 音楽之友社、p.14.
- 13) 鈴木裕子（2018）. 第4章「表現」の保育 10 節動きによる表現 横井志保・奥美佐子（編）新・保育実践を支える表現 福村出版、pp.135-145.
- 14) Vygotsky, L.S. (1930). *Воображение и творчество в детском возрасте*. 広瀬信雄（訳）(2002). 新訳版 子どもの想像力と創造 新読書社、pp.8-16.
- 15) 吉永早苗（2016）. 子どもの音感受の世界－心の耳を育む

音感受教育による保育内容「表現」の探究－ 萌文書林、pp.72-90.

謝辞

本論文は、多数の領域「表現」に関わるテキストの中の事例を複数使わせていただきました。それらの事例を執筆してくださった方々に感謝申し上げます。

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Analysis of Textbooks Pertaining to the Domain of Expression Published Since 2008

: A Focus on Sounds and Music in Early Childhood Education

Tomoko Tanaka

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

The purpose of this study is to elucidate the experiences of sounds and music that foster children's creativity. Cases in which children listen to, explore, and inquire into sounds and music presented in the textbooks of early childhood teacher training schools were analyzed. Then, based on the findings, we discuss the matters that students should understand with regard to the teaching method for the "expression" domain. Nineteen textbooks on the domain of expression published since 2008 were sampled, and fifty-eight cases of children listening to, exploring, and inquiring into sounds and music in early childhood education were analyzed. The details of the cases were classified into six categories: "noticing and listening to sounds," "exploring while listening to sounds," "activities of intentionally creating sounds," "playing with musical instruments," "vocal expression and creating songs," and "enjoying rhythm and beat." The analysis shows that creativity is nurtured when children engage in such experiences as exploring and inquiring into various sounds by carefully listening and using their five senses while interacting with their environment and creating music while responding in an improvised manner using familiar object and voices. Furthermore, the findings also indicate that children's creativity is fostered in three gradual phases: early phase, exploratory phases, and inquisitive phase. The aforementioned findings suggest that learner should understand the importance of paying attention to a child's expression and understand and support the phase in which the child is currently in.

Key words : expression in early childhood educational content, textbooks, early childhood education site, exploration and inquiry, creating sounds and music